「笹川杯作文コンクール 2009」～中国語で応募～ 第 1 回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

「日本語との縁」

上海市　鄂晴

私は、中国の改革開放という大きなうねりのただ中に生まれた。当時は、天地がひっくり返るような変化が全国各地で発生していた。特に、上海は経済的な飛躍だけでなく、文化など各方面においても国際水準に達していた。上海テレビ局がエキサイティングな日本のドラマ『燃えろアタック』を放送すると、テーマ曲『青春の火』が巷でこだましたように！少女時代の私も、主人公である小鹿ジュンの聡明さ、努力、向学心に感動させられた。それから、小鹿ジュンを手本として社会的使命や理想に向かって努力しようと志し、自分の理想―日本語の教育家になること―を実現させるという誓いを立てたのだった。

私はとりわけ恵まれていた。祖母が日本語教師で、３回も上海外国語大学から「優秀教育賞」証明書を受けていたのだ。私は６歳から日本語の学習を始めた。家々に灯が点り、星空が広がる頃、同じ年の子供達が漫画を見ている間に、私は苦労して日本語のかな文字あいうえおを学び始めた。

私が 10 歳の時、上海市運動協会会長の許勝文教授は日本で授業を受け持っていた。夫人である銭婉華女史は、ご主人に会うため日本を訪問するにあたり、日本語を学びたいということになった。そこで、私が夫人の教師として招かれた。私の教え方が丁寧で上手であったということで、彼女は私に授業料を払ってくれただけでなく、お菓子やおもちゃを買い与えてくれ、私は“知識は力、知識は金”であると悟ったのだ。

1994 年のある日、捷進学院の日本語教師が急用で授業に来られなくなり、学院の院長はきりきり舞をしていた。ふと、新聞に『祖母に付き添って授業』という作文を見つけ、彼は、すぐ私に“火消し役”を頼んできた。これが、私の教壇“デビュー”の日である。

当時の私は、あごが教壇より少し高いくらい丈だったので、授業の前に「先生、いくつだい？」とからかってくる学生もいた。「14 歳です。」と答えると、その中年学生は冷やかすように「先生よ、俺がいくつか知ってるかい？四十歳だよ！」などと言ってきたので、私はすぐに「無駄話は許しません。授業です！」と厳しく言った。その授業が終わるまで、教室はずっと静かだった。授業の後、学生達は、口々に「あの大人の先生よりいいぞ、教師合格だ！」と褒めてくれた。また、その年には上海外国語大学の夜間部の教壇にも立ち、祖母の助手を務めた。理想があれば、半分は成功したようなものであるとしみじみ感じた。

日本の島崎弘之国際奨学会が中国人を対象に「第一回作文コンクール」を開催し、その一等賞を私が獲得したのも 1994 年だった。一等賞受賞者は全国で 24 人だったが、中学生は私一人で、殆どは大学生以上だった。このことが島崎会長の目にとまり、驚きのあまり彼は私に祝賀の手紙をくれた。「今後、日本語を学ぶためになら、何でも（我々が）全力で資金援助しよう」。また、私の日本語力を高めるため、彼自身が私の通信教育の先生となってくれ、それをきっかけに私たちは“忘年の交わり“となった。

それからまた、『ある日本の学者とある中国の少女の話』という作文を書き、これが東方ラジオ局の「人生の道、心の駅」作文コンクールで受賞した。1999 年には、私の学術論文『私の日本語教育法』が全国ベスト 10 に選ばれた。

2001 年の新月の鐘が鳴り響く頃、島崎氏が手紙をくれ、「君はこれだけ日本語を教えられるんだから、日本語のトレーニング・スクールをやるといい！」と勧めてくれた。それから、私はスクールの設立・運営に関する企画を上海市の主管副市長に自ら提出した。彼の支援をいただき、私のトレーニング・スクールは順調に開校までこぎつけることができた。2010 年には上海万国博覧会が開催されることとなり、私も上海万国博覧会に少し貢献しようという考えが芽生え、無料の日本語トレーニング・スクールを開設した。これまでにここで学んだ生徒は、既に 600 人を超えている。

これが私と日本語の縁である。日本語は私を 14 歳で教壇に上げただけでなく、一生を共にする事業にもなった。